

大槻 磐溪 — 開国を唱えて —

今から約二百年前、大槻磐溪は、江戸に生まれました。

磐溪の父玄沢は有名な蘭学者で、蘭学を日本に広めるためにはオランダ語を日本語に翻訳するための文章家が必要であると考えていました。磐溪の兄は父の後をついで蘭学者になりました。しかし、次男である磐溪は父の強い願いから、漢学者の道を歩むことになりました。

八歳になった磐溪は漢文の勉強を本格的に始めました。どんな学問にも積極的な磐溪は、学んだことをどんな身につけ、十歳のときには他の漢学者が驚くほどの漢文を書くようになっていました。そんなあるとき、父は磐溪に、お世話になっている師匠の家に養子に行くように命じました。当時は父親の命令は絶対でしたが、磐溪は、固く結んでいた口を開くと、

「父上、自分は何か一つの仕事で身を立てたいと考え、漢学を一生懸命に勉強してきました。養子に行く漢学の勉強が続けられなくなります。このお話だけは父上の命令とはいえませんがええせん。どうかお許しください。」ときっぱりいました。父はしかりましたが、磐溪は父の命令を聞きませんでした。

その後も磐溪は学問を続け、十七歳のとき、幕府の最高教育機関である昌平坂学問所に入ることができました。そこで十年間、漢学の勉強に打ちこみました。学問を追究するため全国から集まってきた若者ときたえ合う日々でもありました。

このころ全国の沿岸に外国の船がひんぱんに姿を見せるようになっていました。二十七歳になった磐溪は、昌平坂学問所にもって勉強することだけで世の中の役に立つ人間になれるのか疑問をもつようになっていました。そして、外国の様子はどうなっているのだろうかと考えようになりました。

外国の様子については、蘭学者の父や兄を通して多少の知識はもっていましたが、もっとくわしく知るために

蘭学…

江戸時代の中ごろから、オランダ語によって日本に伝わった西洋の学問。医学や天文学、兵学など。

翻訳…

ある国のことばや文章を、ほかの国のことばになおすこと。

漢学…

昔の中国の学問や文化などを研究する学問。

長崎に行きたいと思うようになりました。長崎は日本でただ一つ、オランダとの貿易が行われていたからです。磐溪は思い切って父に願い出しました。

「父上と兄上から西洋の進んだ科学について聞いてきました。西洋の様子をもっとくわしく知るために、わたしを長崎に行かせてください。」

「長崎はお前が考えている以上にずっと遠いところだ。お前は江戸で学んでいればよいのだ。」

「父上。私は日本を西洋から守るために、どんな方法があるのか明らかにしたいのです。」

最初は許さなかった父でした。しかし、日本を守るために、漢学だけでなく西洋の事情も追究しようとする磐溪の強い思いを知り、ついに長崎行きを許すことにしました。それでも息子のことを心配した父は、出発のとき、知り合いの学者五十五名への紹介状を磐溪に持たせました。

磐溪は紹介状をにぎりしめ、胸をはり、長崎へ旅立ちました。

磐溪は有名な学者を訪ねながら長崎を目指しました。しかし、その途中で父玄沢が亡くなったために江戸にもどることになりました。そして、翌年、何とか長崎におもむくことができました。長崎では、西洋人が起こした事件のために、オランダ人に直接会うことはできませんでしたが、砲術家である高島秋帆などと出会いました。天保十二（一八四一）年には、高島秋帆が行った、当時最も進んだ軍隊の戦い方である西洋砲術演習を見て興味をもち、磐溪は西洋砲術を学びました。フランスやロシア、アメリカの当時の様子を研究し本にまとめたりもしました。こうして、磐溪は、世界を広い目で見るようになっていったのです。

磐溪が五十三歳のとき、大事件が起きました。黒船が突然神奈川の浦賀に姿を現したのです。鎖国を続けている幕府に開国をせまるために、はるばるアメリカからやってきたのです。仙台藩主は数多くいる藩士の中から、



貿易：
外国と品物を買
り売すること。

西洋：
ヨーロッパや
アメリカの国々。

追究：
物事をごまかも
調べて、はっきり
させること。

砲術：
大砲をそのさす
るわざ。

鎖国：
国が外国との行き
来や、貿易などを
しないこと。

西洋の進んだ文明についてくわしい磐溪を選んで浦賀に向かわせました。磐溪は浦賀で、黒船の様子を見届けました。四せきの黒船は今まで日本人のだれも見なかったことがない軍艦でした。

(あのようなくわむりをはいて進む鉄の船に日本が攻められたらひとたまりもない)

次の年も黒船がやってきました。今度は七せきの軍艦でした。

磐溪は報告のために、泊まりこんで黒船を写生しました。もつとくわしく調べようと決心した磐溪は、ある晩、飲料水や燃料のまきを運ぶための船で黒船に近づぐことに成功しました。

(なんて大きな軍艦だろう。がんじょうな船体は大砲のたまも

よせつけないようだ)

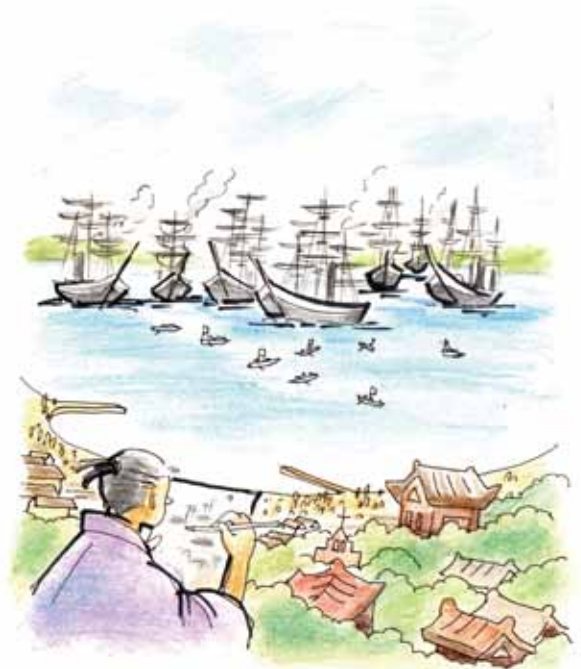
そして、磐溪は軍艦の中にいた中国人の通訳と話をすることができました。当時の中国はイギリスとの戦争に負けて植民地にされていました。この中国人通訳は戦争で乱れた中国からにげてきたのでした。

(日本が中国のように植民地にされないためには、もはや開国しかない)

磐溪は仙台藩主だけでなく、幕府に対しても開国が必要であるという意見書を提出しました。この当時、外国人を日本から追いつぶすべきだと考える人が多く、開国をうったえたために命をうばわれる人も出ていました。磐溪の身にも危険が迫っていました。

しかし、磐溪は自分の考えを変えようとはしませんでした。

やがて、幕府は長い間守ってきた鎖国をやめて開国にふみ切りました。ところが、幕府軍と薩摩や長州などの薩長軍との間に戦争が起きました。仙台藩は薩長軍から、幕府に味方した会津藩を攻撃するよう命令されました。仙台藩は幕府軍と薩長軍どちらに味方したらよいか決めかねました。藩の重役は、外国の事情にくわしく、知



軍艦…
戦いをするために
つくられた船。

植民地…
ある国の支配をう
けている土地。

薩摩…
昔の国の名前で、
今の鹿児島県の西
半分にあたる。

長州…
昔の国の名前で、
今の山口県の
西北部にあたる。

識豊ゆたかかな磐溪いんせきに意見を聞ききました。磐溪は、

「今、国内で争っている場合ではありません。それに、薩長軍は外国人を追い出せと言っていますが、この考えはまちがいです。幕府が進めた開国は正しかったのです。」

と答えました。仙台藩の重役は磐溪の意見を取り入れて、薩長軍に対して、会津を許し戦争をやめるようにとの手紙を送りました。しかし、この手紙は薩長軍には届きませんでした。やがて、仙台藩や東北の諸藩しよはんは薩長軍との戦争に巻き込まれていきました。戊辰戦争ぼしんせんです。戊辰戦争は幕府軍の敗戦で終わりました。磐溪は政府にはむかった罪つみで、牢屋ろうやに入れられてしまいました。何人かの役人が戦争の責任せきにんを取らされて死刑しけいにされました。磐溪も死を覚悟かくごしながら牢屋で過ごししていました。しかし、翌年、磐溪をしたう多くの弟子のおかげで自由になることができました。



大槻磐溪像（一関市）

明治になると、新政府は、外国の進んだ文明を取り入れて豊かな国づくりを進め、しだいに先進国の仲間入りを果たしていきました。

日本は旧暦きゆれきから太陽暦たいようれきに改め、明治六（一八七三）年元日を迎むかえました。磐溪は多くの学者を自宅に招まねいて正月の祝いをしました。大槻家では以前から太陽暦で元日を祝う行事を行ってきたのです。

「わが国も、やっと西洋と肩かたを並ならべることができた。」

とつぶやくなり、磐溪は目を閉とじ、じっと考えていました。このとき、磐溪は七十三歳になっていました。

大槻磐溪

大槻磐溪は、享和元（一八〇一）年、江戸（現在の東京都）に生まれた。漢学者で江戸時代終わりの養賢堂ようけんどう（仙台藩の学校）の学頭がくとう（現在の学校長）を務めた。磐溪は、西洋の進んだ文明や海軍の強さについて詳しく理解している数少ない人物であった。幕末には、仙台藩主伊達慶邦いだけいさなかつをはじめ多くの仙台藩士たちにも影響えいじやうをあたえた。

戊辰戦争…
一八六八年から次の年まで行われた新政府軍（薩摩・長州）と旧幕府軍との戦い。

旧暦…
昔のこよみ。月のみちかけをもとにして作ったこよみ。

太陽暦…
地球が太陽のまわりを一回りするのにかかる時間を一年としてつくったこよみ。一年を三六五日とした現在使っているこよみ。